

ユニバーサルデザインを基盤とした授業改善

児童に問いをもたせる発問の工夫

児童が「だって…」と説明したくなるような問題提示の工夫

- 条件不足・情報過多の問題
- 一部を隠して提示
- ゲームやクイズ等
- あえて誤答を提示



児童の「あれ?」「え?」を引き出す発問の工夫

- 本当にそれでいいの?
- これはいつでも言えることかな?
- どのように考えたのかな?
- 何か使えそうな考えはない?

思考のスタートラインを
そろえる

全員が授業に参加できる
ようにする

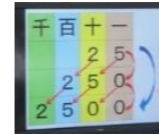
児童の学習意欲を喚起
させる

イメージ化を促す手立て

イメージ化＝表現様式の変換・具体化

抽象的な表現(問題文・式)→具体的な表現(図や操作, 言葉)へと変換

- ICTの活用(デジタル教科書の活用)→見えにくい動きを見える化
- 板書の工夫(児童の思考の流れに沿った板書)
- 図や絵で表現
- 図や絵で表現されたものを選択
- 動作化, 具体物(半具体物)の操作
- 挿絵の活用



伝え合いの手立て

- 続きの思考 … ある子の発表の一部分を聞いて, その続きを考え説明させる。
- 再現 … ある子の発表の中身を説明させる。
- ヒントからの思考 … ある子に自分の気づきのヒントを出させ, 何に気付いたかを考え, 説明させる。

子供が語る相手は子供



聴き合い

認め合い

深める

個のつまずき分析(全体研修)

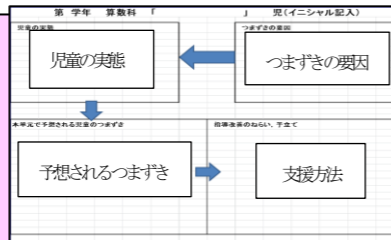
分析シート・動画を活用した分析研修

授業研前に必ず実施

- 児童のレディネステスト, ノートやテストのコピー, 授業での様子を撮影した動画を活用。
- 資料をもとに, 児童がどこにつまずきを感じ, その原因はどこにあるのかを分析。分析結果から, つまずきを想定した本時での支援内容を全教職員で共有。

教職員の意識統一

- 「めざす子どもの姿」「どの子も主体的に学べる授業のイメージ」の共有化。
- 「本時の目標」「学習課題(めあて)」「評価」の整合性。



授業改善

つまずき分析
支援内容の共有



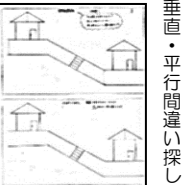
振り返り

実態把握

ドリルタイムの取組

- 算数科を「楽しい」と感じられるような教材の開発。
→三年次は国語科へも拡充
- 国語科の読解力・語彙力を育成する課題。
- 式→図, 文→図を行き来するような課題。

毎週実施



垂直・平行間違い探し

個に応じた取組

- ①ランチタイムスタディ(LTS)
・給食準備中(15分間)の学力補充。学習のつまずきを少しでも解消し, 学習に意欲的に向かえるように支援。
- ②放課後学力補充
・低学年を対象に実施。課題を最後までやり遂げる力を育成。
・ごほうびシールを用いて, 意欲が持続するように工夫。



子供の姿を中心にした協議会

授業動画を活用した協議会

- 児童の様子を中心に授業の様子を撮影。
- 動画を見ながら「児童にとって, 本時の手立ては有効であったか。」「どの場面つまずき, 改善するにはどうしたらいいか。」を, 全教職員で振り返る。
- 協議会で出た意見や指導助言の内容をまとめた「振り返り」を作成し, 学びを共有。

日々の情報収集・実態把握

気づきの交流

- 研究推進教員や学力フォローアップ教員が授業中の児童の様子, 反応などを見取り, 気づきを担任と交流。意見を交わす中で具体的な手立てを考え, 実践する。

学力フォローアップ児の資料集め・個別の指導計画の作成

- 児童の実態が分かる資料を常に収集。(ノート, プリント, テストのコピー)
- どのようなつまずきがあり, どのような手立てを講じたかを記録した個別の指導計画を作成。

研究仮説

【三年次】
「場面のイメージがしやすくなる手立てを講じるとともに, 友達と考えを伝え合うことでイメージを共有することができれば, 児童の問題場面を理解する力の向上が図れるだろう。」

【二年次】
「問題提示の際に問題場面のイメージ化を促し, 児童に問いをもたせるような発問の工夫をすれば, 児童が自分の考えをもって主体的に思考し, 学力の向上を図ることができるだろう。」

【一年次】
『①焦点化しためあてに対して, 焦点化した活動を仕組めば, 児童が「分かった」「できた」「楽しい」と実感できるだろう。②ペアやグループ学習を活性化して「共有化」をはかる授業をすれば, (一人残らず) 学び合えるだろう。』

これまでの児童の実態

- ▲学習に対する負のサイクル
・授業が楽しくない→学習意欲がわかない→どんどん分からなくなる→算数を苦手と感じる児童の増加→授業が楽しくない→…
- ▲全国学力・学習状況調査の結果を分析すると, 「学習の積み重ねがない」「問題文の意味が分かっていない」「無回答が多い」ということが分かった。
→正答率40%未満の児童の割合は約30%
- ▲三次市学力到達度検査(算数科)では, 三次市平均と全国平均のいずれかを下回る学年が6学年中4学年だった。

H30 算数	全国	市内	本校
1年	82.3	88.8	92.8
2年	74.3	82.3	85.6
3年	73.3	79.7	75.8
4年	72.0	80.8	73.8
5年	63.1	71.1	56.6
6年	73.1	78.8	73.8

どちらも上回っている

いずれかを下回っている

このような実態から…

成果と課題

児童の変容

- ◎課題に対して根気強く取り組める児童が増えた。
- ◎児童意識調査において, 算数科が「楽しい」「分かった」と肯定的に評価する児童の割合は, 80%以上になった。(低学年においては, 約90%だった)
- ▲否定的な意見については, 「計算が嫌だから」「頑張っても解けない」「算数が苦手・難しい」という回答が多かったことから, 「楽しい」だけではなく, 「できた」という達成感も感じられるような学習をしていくことで, 「やってみよう」という意欲に今後つなげていく必要がある。
- ▲学力の定着には課題が残った。基礎学力が定着していないため, 考え方が合っても計算間違いをしてしまう児童がいる。

教職員の変容

- ◎児童がつまずきそうな場面が想定できるようになり, 事前に手立てを考えることができるようになった。
- ◎算数科の系統性を意識して指導することができるようになった。

M-Fileの作成

- ◎算数科の各単元の指導のポイントやつまずきに応じた支援方法などについて, 各学年, 各領域, 単元ごとにまとめた「M-File」を作成し職員に配付。授業で活用した。

